

聖覚と法然・親鸞

那 須 一 雄

法然（1133～1212）は、『選択集』において、善導（613～681）の『散善義』就行立信釈を起行を示すものとして受容する。ここにおいて、法然は、『観無量寿経』の三心（至誠心・深心・廻向発願心）を浄土往生のための安心として、称名念仏を起行として明確に位置づけた。『選択集』二行章・三心章）法然によって提示されたこの三心と行の問題について、法然の道友・法友といわれる聖覚（1167～1235）、聖覚を深く敬慕した法然門下の親鸞（1173～1262）がどのように理解したのかについて考察しようとするのが本論の目的である。

【A、三心理解について】

法然の三心解釈の特色は、まず至誠心釈については、「不得外現賢善精進之相内懷虚仮」の文についての解釈に重点を置く。そしてこの部分を解釈する中で、特に内心における真实性を強調し、その真实性の基準を如何に純粹に阿弥陀仏の本願を信じ、阿弥陀仏の浄土を願っているかに置いた。ここに「内外一致して至誠心真実なれ」という自力的至誠心解釈

から法然独自の他力易行道的な解釈への展開が見られる。⁽³⁾すなわちこの至誠心釈を解釈する中で法然は、阿弥陀仏の本願を信じ、阿弥陀仏の浄土を願うべきことを説いた。

また至誠心釈の自力的実践を説いたとも取れる箇所については、初期の著作であると考えられる『三部經大意』において、総別の二義を示すという立場をとった（昭法全34⁽⁴⁾）。

深心釈については、法然は、深心釈冒頭の所謂「機法二種の深信」、就人立信釈の前の「決定自心建立」の部分、就人立信釈を中心に釈す。⁽⁵⁾

機の深信と法の深信の関係については、①衆生に自己の煩惱具足性を自覚させるために説かれたのが機の深信、②機の深信と法の深信とを連続させているから、衆生は救いを確信できると説いている点に、法然の解釈の独自性が見られる。『往生大要抄』昭法全58～59、『御消息』昭法全579～580。

また廻向発願心釈については、冒頭の「廻向発願心と言ふは…故に廻向発願心と所づく」の部分の引用が中心である。

釈する場合、称名念仏を修することの重要性と、念仏以外の余善は、阿弥陀仏の極楽浄土へ廻向することの重要性を説く。『御消息』昭法全583～584、『浄土宗略抄』昭法全599～600）

次に聖覚は、『唯信鈔』において、至誠心釈については、自利真実について述べた箇所以降は釈さず、それまでの所謂「施為趣求」の文までを釈する（真聖全②747～748）。そしてここで、阿弥陀仏（法蔵菩薩）の菩薩としての行が、真実心にもとづいたものであった故に、浄土を願う人は、まことの心を起すべきであると説き、法然を承けて、行よりも信に重点を置いた解釈をする。また恥がましいことをむき出しにして、罪を人の前にさらけ出すことが真実心ではないとも誠める。（真聖全②747～748）

深心釈においては、法然と同様、深心釈冒頭の所謂「機法二種の深信」の部分を中心に釈するが、聖覚においては、阿弥陀仏の本願力の働きを疑うことを誡め、法の深信を強調する。法然は、自己の煩惱具足性を自覚させねば衆生は称名念仏に帰さない。機法二種深信を連続させているからこそ、衆生は称名念仏による救済を信じられるということを述べており、ここに法然からの展開が見られる。

回向発願心釈については、法然の『選択集』の記述とほぼ同じである。

これに対して親鸞は、安心を『大無量寿経』の三心（至心

・信樂・欲生）を中心に考え、この『大無量寿経』の三心を真実と捉え、『唯信鈔文意』においては、『観無量寿経』の三心は、定機・散機の自力の心であり、『大無量寿経』の三心を得るための方便であると述べる。

また『教行信証』では、『観無量寿経』の三心に方便（願）と真実（隠）とを見えるという立場（真仮分判）を示し、真実心としての『観無量寿経』の三心については、『教行信証・信巻』において、他力廻向説の立場から、独自の訓点を打って、自己の立場を示す（真聖全②51～57）。

また三心相互の関係については、深心を中心に考えるという立場は、三者とも同じであるが、『大無量寿経』の三心を中心に考える親鸞にとっての中心は、深心よりも信樂であったといえる。

【B、起行理解について】

起行理解については、法然は、『選択集』において、就行立信釈を起行を示すものとして引用し、称名念仏一行専修を説いた。すなわち、安心（三心）から発動する起行は、五正行中の第四称名念仏のみであるという廃立義が『選択集』の基本的な立場である。しかし、『選択集』では起行を示すものとして、就行立信釈の五正行をすべて引用しているため、専修とは五正行を修することと解釈できる。また、三心章末で、三心から発動する起行の説明をする中で、総（諸行）と

別の二義を述べる（真聖全①967¹⁴）。

これが、聖覚の『唯信鈔』では、起行として示す称名念仏を、法然と同様、就行立信積により理解する（真聖全②740¹⁵）。しかし、五正行中、正定業である称名念仏一行を修することが、専修であり、他の行を兼ねることは雑修であると述べられる（真聖全①743～744）。この立場は『選択集』の廃立義を明確にしたものといえる。

さらに親鸞に至ると、他力廻向説・真仮分判の立場から、正定業である五正行中の称名念仏についても、真仮を分かť立場が示される。¹⁶ 専修については、自力心で修する五専修が説かれ（『教行信証・化身土巻』真聖全②155～156、『愚禿鈔』真聖全②471～472）、また雑修については、聖覚の説をさらに深めた助正兼行の雑修という理解（『愚禿鈔』真聖全②472、『高僧和讃』真聖全②509～660）、あるいは、専修念仏一行に帰しても、それにより現世利益を祈る場合は、雑修になるという理解（『高僧和讃』真聖全②509～670）が示される点に特徴がある。

【結論】

以上述べたことにより、法然の三心と行についての解釈を承けつつも、法然没後の、他力義の意味が問われない、諸行兼修を容認するという当時の念仏信仰の状況を受け、他力念仏義を明確に示したのが聖覚の『唯信鈔』であり、さらにそれを厳密に体系化したのが親鸞であったといえよう。

1 藤枝昌道氏『聖覚法印の研究』18～19頁参照。

2 親鸞は、聖覚を「法然上人の御おしえよく御こころえたるひと」と（『末灯鈔』真聖全②686）といい、また『唯信鈔』のことを「めでたき御ふみ」（『御消息集』真聖全②709）と述べる。

3 この点については、拙稿「法然とその門下における善導・至誠心積の解釈」（龍谷大学大学院研究紀要・人文科学―第16集―）において詳しく論じた。

4 このように至誠心に惣別の二義を見る立場は、法然教学の初期段階をあらわしたものであると考える。（拙稿「法然における善導教学の受容について」参照―真宗学88号60頁以下―）

5 就行立信積を起行として理解する法然は、深心釈解積において、就行立信積を解釈している箇所は少ない。

6 まことの心でない状態としては、「淨土をねがふころなき」「今生の名利に著す」「不善の心・放逸の心あり」という状態をあげる（『唯信鈔』真聖全②747）。

7 法然には「一つにこの世の面目をばいかにもありなるとて、人のそしりをかへり見ぬがよきぞと申べきにては候はず」（『御消息』昭法全578）と述べている箇所もある。ただし、これは、本尊や道場内の莊嚴・境内の様子に関して面目を気にすることに關して述べた後にくる文であり、一般の生活態度について述べたものではない。

8 ここにおいて聖覚は、罪障が深く散乱放逸の人間は、阿弥陀仏に救われたいという人があるが、それは仏力を疑うことであり罪であると述べる（『唯信鈔』真聖全②748～749）。以下、自己を蔑み、仏の広大不思議な本願の働きを疑ってはならぬことを、警えを述べつつ主張する。

9 聖覚は「廻向発願心といふは、名のなかにその義きこえたり、くわしくこれをのぶべからず」（『唯信鈔』真聖全②750）と述べる。これは、『選択集』三心章の「廻向発願之義、別の釈を俟つべからず」（真聖全①967）という記述とはほぼ同様である。

10 『観経』の三心をえてのちに、『大経』の三信心をうるを一心をうるとはいふなり。このゆへに、『大経』の三信をえざるをば一心かくるといふなり。この一心かけぬれば、実報土にはむまれずとなり。『観経』の三心は、定機・散機の自力の心なり。定散の二善を廻して、『大経』の三信をえんとねがふ方便の深心と至誠心とするべし。真実の三信心をえざれば、真の報土にむまれず。」（『唯信鈔文意』真聖全②634）

11 「問う、『大経』の三心と『観経』の三心と一異いかなぞや。釈家の意によりて、『無量寿仏観経』を按ずれば、顕彰隠密の義あり。顕と言ふは、定散諸善を顕し、三輩三心を開く。…如来の異の方便、欣慕浄土の善根なり。これはこの経の意なり。即ちこれ顕の義なり。彰と言ふは、如来の弘願を彰わし、利他導入の一心を演暢す。…まことに知んぬ。これすなわちこの経に顕彰隠密の義有ることを。…『大経』『観経』の顕の義によれば異なり。彰の義によれば一なり。知るべし」（『教行信証・化身土巻』真聖全②147～148）

12 法然は、『三部経大意』（昭法全32～33）や『選択集』（真聖全①967）において、深心を三心の中心に考えろという見解を示す。聖覚もこれを承けて、『唯信鈔』で「ただ信心を要とす。そのほかおほかえりみざるなり。信心決定しぬれば三心おのづからそなわる。…このゆへに三心異なるにたれども、みな信心にそなわれるなり」（真聖全②750）と述べ、法然とはほぼ同様の立場を示す。

一方、親鸞は、『教行信証・信巻』三一問答の字訳釈において「疑蓋難はること無きが故に、これを信樂と名づく。信樂すなわち是れ一心なり。一心すなわち是れ真実信心なり。この故に、論主、はじめに一心と言えりなり」（真聖全②59）と述べ、本願の三心の中では、信樂が中心であるという立場を示す。

13 『選択集』一三行章の終わりの「百即百生専修正行」（真聖全①940）の「専修正行」には、正定業以外の助業も含めて理解していると考えられる。このような理解は『浄土宗略抄』（昭法全

601～603）にも見られる。

14 先の専修理解や、このような記述は、浄土教理史上、『散善義』就行立信釈を起行として理解したのが、法然の『選択集』が初めてであったため生じたものであると考える。

15 法然は、『選択集』において、源信の『往生要集』を承けて、善導の『往生礼讃』の安心起行作業論を受容する。そして源信が『往生要集』において、『浄土論』の五念門を受容したのと同じ意味で、善導の『散善義』就行立信釈を起行として受容している（拙稿「法然における善導教学の受容について」—真宗学88号—参照）。従って、『往生要集』で起行として受容されている五念門については、『選択集』では全く触れていない。これを承けた、聖覚も『唯信鈔』において、五念門については全く触れていない。

一方、『往生論註』を重視した親鸞は、五念門を法藏菩薩や還相菩薩の浄土からの活動相として理解する立場を示す。（拙稿「法然門下における五念門・五正行の受容と展開」—印仏研究41—1—参照）

16 この点については、拙稿「日本浄土教における五念門・五正行の受容と展開」—龍谷大学大学院研究紀要・人文科学—第14集—において詳しく論じた。

（昭法全は『昭和新修法然上人全集』の、真聖全は『真宗聖教全書』の略）

〈キーワード〉 聖覚、法然、親鸞

（西本願寺教学研究所研究員）